

## 21世紀の風景

興和㈱ 取締役社長 三輪 隆康



少年時代に私が読んだ空想科学小説（今流に言えばSF小説）の描く未来とは、たいてい21世紀が舞台でした。つまり21世紀は未来そのものであり、「今」とは断絶した夢の世界だったわけです。そこで21世紀世界の典型的なイメージとは、無機的なまでにきれいで整然とした街並みであり、「赤提灯」とか「通勤電車」の類いの平凡で生活臭に満ちた光景は、この空想からは注意深く排除されていたのでした。

ところがふと気がつく今年1991年。あとちょうど10年で世紀が替わります。10年、といえどもう少しで手が届く近未来です。どうやら21世紀といっても想像を絶する夢の世界ではなく、見慣れた風景が各所にそのまま残っていそうな気がしてきました。そこでSF世界とは視点を変えて、ここでは、今と変わらない21世紀、あるいは今日の延長線上にある21世紀、というものを気ままに想像してみたいと思います。

まず街角の風景。建物、道路、橋などの建築物はどうでしょう。これは意外に空想の自由度の少ない分野だと思います。たとえば、「東京レポートタウン」とか横浜の「みなとみらい21」などの大規模開発は、もちろん変化の方向と程度はSF的ですが、その景色はほぼ想像できます。そのうちの何割かの建物は設計図があるので、ほとんど寸分違わぬ絵がかけられるのです。

反対に変化に乏しい街並みというものもあるでしょう。駅前のような再開発計画のない、何の変哲

もない住宅地では、家のデザインは逐次モダンなものに変わるものの、電柱がニョキニョキと立ち、ブロック塀もそのままといった日本的な景色が相変わらず見られるのではないのでしょうか。

卑近な例で恐縮ですが、テレビ番組を占ってみます。日本のテレビ放送の歴史は約40年ですが、この間の有為転変を振り返りますと、反対に保守といえますか不変の要素が見えてきます。端的に言えば、「水戸黄門」はその偉大なマンネリぶりで21世紀の茶の間を相変わらず楽しませているかもしれません。高品位テレビの普及でカメラワークは今と異なっているでしょうが、プロ野球の中継なども今同様に盛んであると思われる。こう想像しますのは、日本人の情報娯楽の嗜好が一朝一夕で変わると思われなからです。

次にこの伝統ある「オペレーションズ・リサーチ」誌の読者各位の前では、文字どおり釈迦に説法で恐れ入りますが、私どもの社業にも関係します科学・産業技術の領域に話を移しましょう。

ものごとの延長線上に未来を予測する、いわば外挿法的手法が使えるジャンルがいくつかあります。エレクトロニクスの分野では、半導体メモリーの集積度は3年で4倍などといわれており、このペースでゆけば21世紀初頭には100メガビットあたりが予想されるそうです。そうすると、このメモリーを使って何ができる、または何がしたい、といったことが技術者の皆さんにはあ

らかた予測がついてくるものと思います。

スケジュールの上でこうなるであろう、という予測もあります。より厳密に言えば「順調にいて」の但し書きつきですが…。その典型が医薬品の開発です。ご存じのように新薬の開発には「10年100億」ともいわれる、長年の開発期間と巨額の費用がかかります。私たち新薬メーカーはこれら「とき」と「金」の双方に巨大投資をしているわけです。内輪話はさておき、他の業界に比べ開発期間が特に長いというのがお話ししたい点です。(10年というのは短かめの見積もりです)。すると今開発をはじめた医薬品は、「うまくゆけば」21世紀初頭によやく世に出るわけです。

というわけで、来世紀に入っのの新薬地図はすでに大体予想がついておりまして、各社ともその予想のもとに開発競争にしのぎを削っているのです。

では風俗、習慣を考えます。たとえば「80年代の風俗」というように、時代時代の流行を反映したうつろいやすい部分もたくさんあります。そこで10年前、20年前といった身近な過去にも、われわれノスタルジーを感じるわけです。しかし、時間のスケールを100年単位にまで拡大しますと、かえってその永続性がきわ立ってくることになります。つまり、過去数百年も綿々と続いてきた風俗などは、今後100年、200年とたぶん継続していくだろうと想像されるわけです。

たとえば畳。日本の気候、日本人の清潔好み、空間利用の器用さ…など、畳はわが国の人と風土に見事にマッチしており、住宅がいかに洋風化しようとも簡単に消えてなくなるとは考えられません。こんな発想でいけば、米(米食)とその周辺文化であるお茶漬、赤飯、握り飯、漬物といったあたりも残りそうです。さらに目を広げれば、祭り、信仰(神社仏閣)のように心にかかわる部分

は、千年単位もしくはそれ以上の寿命を持っていると思われま。

こんな例もあります。ご存じかと思いますが、昨今のお寺はコンピュータが普及してきており、会計処理はもちろん、「檀家」管理のためのプログラムソフトなどというものまであるそうです。ですから奥の寺務所をのぞくと、剃髪、墨染のお坊さんが鮮やかな手つきでパソコンをたたいている、などという光景にお目にかかることとなります。今後は、このような伝統と先端技術の絶妙な融合が、もっとあちこちで見られるようになりそうです。これなどは、21世紀のちょっと楽しい一風景と申せましょうか。

見てきたような講釈を述べてしまいました。予想、予言の類いはたいてい当たらないものですから、以上の記述もさりと読み流していただければ幸いです。ただ、現在を形作っているモノとか仕組みとか情報といったものが、すでにかかりの割合で21世紀に向けて流れ込み始めておりまして、そんな様子にも注目したかったです。

特に経営の立場から申しますと、10年先、20年先がわからない、では不安です。本当はもちろん先のことなどわかりませんから、とりあえず手ごたえのありそうな現実というのを手がかりに、自分の意思で未来予測してしまうわけです。これが経営ビジョンとでも言いましょうか。あとはこのビジョンに乗って走っていますと、3年先、5年先あたりが次々に目に入ってきます。この見えてきた景色にしたがってハンドルを切ったり戻したりすることが経営計画にあたりま。

もっとも、こうやって安心して運転していると、湾岸戦争とかソ連の混乱などのように、思いもかけない落石や崖崩れに出会うことがあります。ドライバーとしましては、ブレーキ、ハンドル操作に片時も気を抜けないところであります。